



S0設計事務所

寺林 成子

身障者スポーツセンター

1980年 東京理科大学卒業
第3回学生設計優秀作品展 入所
松永巖都市建築研究所 入所
1982年 PALインターナショナル 入所
1984年 S0設計事務所設立

「テーマを持ち、プロセスに時間をかける」

インタビュー：日本大学 浅岡 翔太/萩原 玲子

学生の頃の私は、勉強ひとすじの真面目な学生ではありませんでした。どちらかといえば「遊び人」。友だちとだべり、スポーツに明け暮れる日々でした。でもこうした友人とのつきあいや、スポーツに打ち込んだことが、建築設計を仕事にしている今とても役に立っているような気がします。私の仕事の進め方は、まずクライアントの話をじっくり聞くことから始まります。クライアントの暮らし方や個性などを知ることから、デザインは生まれてくると思っていますからです。言葉をかわし、言葉の裏側にある本心をいかに読みとるかで、その人にふさわしい建築ができてくると思っています。さらに設計という仕事は長期戦ですので、体力がものをいう場面がかならずあります。このコミュニケーション能力と体力は、学生時代の友だちづきあいとスポーツから得たものなのでしょう。

—— どのようなテーマをもって建築に向かっていきますか？

「楽しい空間づくり」これは私の変わらないテーマです。建築の仕事をしてよかったと思うのは、完成した住宅にクライアントが足を踏み入れた時、パッと顔が輝き、体じゅうに喜びが溢れている姿を見ることです。そして5年後、10年後にうかがっても、私の設計した住宅で、楽しそうに暮らしている家族に出会うことです。

また最近、タイルと鉄に興味をもっています。タイルや鉄が本来もっている良さを引き出せるような使い方を模索しています。

—— 実際にはどのような卒業設計を行いましたか？

スポーツが好きだったので、障害者のスポーツセンターにしました。当初は障害者のスポーツ施設だけをつくらうと思ったのです。25年前には、そうした施設は大阪の郊外に1カ所あるだけでした。交通の便がいい都心にあったほうが利用しやすいと思って、計画する土地を探しました。当時の卒業設計は、架空の土地で計画するのが当たり前だったのですが、私はリアリティを出したかったのです。



卒業設計写真

夏休みに多くの時間をかけて、資料集めに没頭しました。集めた資料は、指導を受けていた先生に「卒業論文が書けるね」と言われたほどでした。資料集めや障害者の施設の見学を重ねていくうちに、障害を持った方が社会復帰するには、単独のスポーツ施設だけでは不十分で、医療施設やリハビリ、屋外で運動ができるような複合施設が必要だと思うようになったのです。

—— 卒業設計は現在の仕事に何かしらの影響はありますか？

ある障害者にとって役立つものが、他の障害者には邪魔になってしまうこともあります。建築というハードなものだけでは補いきれないことがあることも学びました。こうしたことは設計に入る前の調査で分かったことなのですが、線を引く前に建物を使う人のことを知ることが、設計なのだということを学びました。これは、今でも私の仕事の基本になっています。

—— 今、自分の卒業設計を振り返って思うことはありますか？

卒業設計を提出したときは、充実感でいっぱいでした。当時は障害者のリハビリ施設は今ほどなかったもので、自分が設計した建築で世の中が変わるのではないかと自負したほどです。みなさんも世の中に強くアピールできるものをつくってください。

—— 最近の卒業設計を含めて学生に伝えておきたいことはありますか？

私の学生時代とくらべて、パワーを感じる学生が多くなったのではないのでしょうか。その一方で、何がやりたいのかという意志がはっきりしていない学生が多いような気がします。卒業設計というのは、作品を格好よくつくることではありません。設計を通して、自分が世の中に何を伝えたいのかだと思うのです。ですからテーマを決めてそれに向かっていろいろなものを見たり、聞いたり、読んだり、考えたりといったプロセスがとても大事です。その過程で、最初に決めたテーマの方向が少し変わってくるかもしれませんが、行き着く先も違ってくるかもしれません。でも設計に入る前に見たり、聞いたり、読んだり、考えたりしたことは、かならず設計に生きてきますし社会に出てから、かならず役に立ちます。プロセスに時間と情熱をかけることで、一生使える丈夫な足腰ができます。

自分が何をやりたいのかを知るためにも卒業設計はとてもいい機会です。やりたいことを探して、テーマを決めて歩き出してください。歩き出すことで自分が見えてきます。卒業設計に真摯に取り組むことで、将来自分はどのような道に進みたいのかも、その過程で分かってくるはずですよ。